

早産となった母児との関わりをとおしての学生の経験

Experiences of the Student in Caring about Mother and Child at Giving a Premature Birth

白石 佳子¹⁾

Yoshiko Shiraiishi

要旨

近年の周産期医療の進展から、出生率が低下する中、早産児や低出生体重児などの新生児の出生は増加している¹⁾。本研究では、母性看護学実習で早産となった女性を受け持ち、NICU 面会へ同行し、後日、小児看護学実習のNICU/GCU 見学実習でその母児と再会できた学生の経験を明らかにした。研究デザインは質的帰納的研究である。母性看護学実習での経験から【対象への接近の工夫と戸惑い】【褥婦の気持ち、思いへの気づき】【出産を肯定的に承認し祝福する】【母性意識の芽生えについての心配】【母児関係のスタートを確認して安心】【母児分離の現実を理解】【実習終了による寂しさと不安】の7つのカテゴリー、小児看護学(NICU/GCU 見学)実習での経験から【再会時の母親の姿に安堵】【母児の関係性の発達への気づき】【児の成長の様子を確認】【NICU/GCU 入院が長期にわたる現実を実感】【父親のことについての心配】の5つのカテゴリーが抽出された。また、実習指導者との関わりで【看護者としての関わりを学ぶ】という経験として1つのカテゴリー、実習終了後は【家族のあり方や支援への興味・関心の高まり】【母親としての役割や責任の理解】【自己の将来像と課題を見出す】という経験として3つのカテゴリーが抽出された。

キーワード：早産、母児との関わり、学生の経験

Key word : Premature Birth, Caring about Mother and Child, Experiences of the Student

I. 諸言

近年の周産期医療の進展から、出生率が低下する中、早産児や低出生体重児などの新生児の出生は増加している¹⁾。実習施設が総合周産期母児医療センターであるという母性看護学・小児看護学実習の現状から、看護学科の学生が早産となった事例を受け持つことがある。早産や早産児に関する看護学生への教育に関する研究には、NICU/GCU 実習に関するものが多く、対児感情に関すること²⁾、その実習における学生の学び^{3) 4)}や効果的な実習方法の検討⁵⁾があり、いずれも小児看護学実習での調査用紙や実習

記録、経験録の分析によるものである。本研究では、母性看護学で早産となった母児を受け持った学生が、その後、小児看護学のNICU 見学実習で再会した事例をとおして経験したことを明らかにするため、母性および小児看護学実習で母児と継続して関わった学生の語りを記述し、質的帰納的に分析した。本研究より得ることができた学生の対象に対する理解や母児とその家族との関わり、それらをとおしての学生の経験について、次世代育成の看護への教育に必要な資料の一部として報告する。

1) 山口県立大学 別科助産専攻

Yamaguchi Prefectural University, Department of Maternal Nursing and Midwifery

Ⅱ. 研究目的

母性看護学実習で早産となった母児を受け持った学生が、その後、小児看護学の NICU/GCU 見学実習でその母児に再会した事例をとおして経験したことを明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究

2. 研究対象者

母性看護学実習で早産となった女性を受け持ち、NICU 面会へ同行し、後日、小児看護学の NICU/GCU 見学実習でその母児と再会できた A 大学の看護学科学学生。

3. データ収集期間

2011 年 10 月～2012 年 3 月

4. データ収集方法と分析

学生アドバイザーを通じて、学生に連絡をとり、直接研究者が研究協力について説明し、同意を得た。データ収集は、半構成的面接法を用いて、独自に作成したインタビューガイドを用いて面接を行った。面接は、学生本人の都合の良い日時とし、1 回 50～60 分程度で、複数回とした。インタビュー内容は、IC レコーダーに承諾を得て録音した。語られた内容は、逐語録におこし、データ分析は継続的に行い、同類の内容や意味するものと思われるものを抽出し、それらの意味づけを行い、質的に分析を行った。分析にあたっては、研究者のもつ能力やバイアスが結果に影響する⁵⁾ことから、信頼性・妥当性を高めるため、以下のことを行った。①事前に、プレテストを行う。②面接は複数回行い、整理、分析した内容について研究協力者に確認してもらう。③母性・小児領域の臨床経験を持つ看護師や研究者と話し合いをもつ。

5. 倫理的配慮

研究協力については、自由意思に基づき、同意しても途中で断ることが出来ること、また断ることで不利益を被ることはないこと、研究同意後や研究終了後にも、同意の撤回が出来ること、得られたデータは匿名化し、本研究以外には使用しないこと、成

績には一切関係しないこと、研究成果は学会等で発表することについて文書と口頭で説明し、書面にて同意を得た。面接は本人の都合の良いときに行い、対象者の拘束感につながらないように配慮した。面接場所はプライバシーを保持できる個室で行い、面接の際、話したくない時や精神的負担を感じる時は申し出が出来ること、面接終了後も疑問や不安を感じたときは、研究者と連絡が取れるよう連絡先を伝えた。本研究は、所属大学の倫理審査委員会で承認を得て開始した。

6. 本研究における用語の定義

「学生の経験」とは、学生の実習の場における外的あるいは内的な現実との直接的接触、もしくは認識としてまだ組織化されていない、事実の直接的把握であり、何事かにつづり、技能や知識を得ること、何らかの意味で自己を豊かにするという意味も含む⁶⁾。

「早産」とは、妊娠 22 週以降から 37 週未満の分娩をいう⁷⁾。

「NICU」とは、neonatal intensive care unit の略で、新生児集中治療室のことである。

「GCU」とは、growing care unit の略で、NICU の後方病床・回復室をいう。

Ⅳ. 結果

研究協力者は、本研究に同意を得られた学生で、母性看護学実習・小児看護学実習の履修を終えた学生 1 名であった。

本研究協力者の学生の経験は次の 4 つの側面で構成された。学生の語りから抽出されたカテゴリーを【 】、サブカテゴリーを< >、学生の語りを「 」で示す。

1. 母性看護学実習での経験

母性看護学実習での経験では、7 つのカテゴリーが抽出された。

1) 【対象への接近の工夫と戸惑い】

学生は妊娠後半期にある妊婦で、妊娠リスクの状況によっては分娩計画も予定にある受け持ち対象者との最初の出会いを接近の工夫と戸惑いとして、次のように語った。

<対象者の印象>

「小さくて小柄な人で、優しそうだなって思いま

した。」「いつもにこにこされてて、聞いていいよっていう雰囲気の方だったの。」

<会話のきっかけは姉の出産>

「姉も予定より早く生まれたので、予定より早かったらびっくりしますよねって。」

<学生としての関わり、コミュニケーションへの戸惑い>

「不安を抱えた妊婦さんにどこまで尋ねていいのかわかって、ずっと考えてて、少し戸惑ったりした。」

2) 【褥婦の気持ち、思いへの気づき】

対象妊婦の出産（早産）後、学生は褥婦と関わる中で、様々な褥婦の気持ち、思いに気づいた。

<ボディイメージの変化と早産後の不思議な感覚>

「もともとあまり大きくなかったし、いつの間にかいなくなったと話してて。」

<想像した通りの出産ではなかったという喪失の気持ち>

「きっと想像していた通りの妊娠出産が叶えられなかった。やっぱりなんだかなっていう気持ちを持っているのかな。」

3) 【出産を肯定的に承認し祝福する】

学生は、出産が早産となった現実を受け止め、褥婦と接した。

<出産を祝福>

「ただ子どもがきちんと生まれてきたことが、すごくやっぱりいいことだし、嬉しいことなので、おめでとうございませうという風に話してて。」

4) 【母性意識の芽生えについての心配】

早産となった褥婦の反応を受け止めながらも、褥婦の母となる過程について考えていた。

<早産後の母性意識>

「いつの間にか出て行っちゃったという感じとおっしゃって、ああ母親として、母性とか持てるようになるのかわかって。」

5) 【母児関係のスタートを確認して安心】

学生は、母親とともに児との対面の場に助産師とともに同行することができた。その場面を振り返り、次のように語った。

<母親の反応に安堵>

「(母児の初対面に) その時の反応がもう一番うれしそうで、わあ、第一声にちっちゃいかわいって、もう笑顔でにこにこ可愛って言ってて、ああ良かったって思ったんです。」「母親と子ども

ですごいなあって、(略) スタートなんだなあって。徐々に愛情が芽生えていけるだろうなあって、一安心した日でした。」

6) 【母児分離の現実を理解】

学生は、早産となった母児が病院内で離れて過ごす過程を目の当たりにしながら、褥婦の様子を次のように語った。

<寂しそうな表情と児への語りかけから母親の感情の高まりを予測>

「(お母さんが退院する日)、一番最初に面会に行った時と比べたら、もうお母さんと子どもとの間にだいぶ絆ってというか、母親と子どもっていう気持ちがあるんだろうなあって (略)、それでもやっぱり (略) なんかもすごく寂しそうな顔をしてて、(略) みていたら泣いてしまうだろうなあって。お母さんの眼がもう少し赤くなっている。」

7) 【実習終了による寂しさと不安】

実習期間が終わるその時の気持ちを学生は次のように語った。

<あとのことは知る由もないという気持ち>

「実習が終わってしまったら、もう患者さんのことを知る機会がなくなってしまうので、後のことは知る由もない、そういうのがいつも寂しいなあって。」

2. 小児看護学 (NICU/GCU 見学) 実習での経験

母性看護学実習が終了後、数週間後に NICU/GCU 見学実習となった学生は、そこで対象の母児と再会することとなった。この経験について5つのカテゴリーが抽出された。

1) 【再会時の母親の姿に安堵】

<再会時の様子>

「あれから大きくなったんですよって、すごく嬉しそうに話してくださって。(略) 会えて本当に良かったです。」

2) 【母児の関係性の発達への気づき】

<母親らしさを認識する>

「こういう言い方は失礼かもしれないけれど、母親としてなんか成長したなあって、母親らしくなったなっていう風に思って。子どもを抱く様子とか、その表情とか、向ける視線とかも、お母さんという風になってて。」

<母児間の親密さへの気づき>

「子どもへの仕草とかも、すごくお母さんで、ああ良かったなあ、この子はちゃんと愛されているんだと思って。」

3) 【児の成長の様子を確認】

<児の成長を実感>

「また少し大きくなって、ほんとにすごくなって。」

<児に障がいがあることに気づく>

「少し眼の様子が違うなって、その時思ってた。」

4) 【NICU 入院が長期にわたる現実を実感】

<入院が長期だったこと>

「まだ病院に通ってこないといけない状況なんだというのがわかって。」

5) 【父親のことについての心配】

<会えなかったこと>

「母性の実習中は、お父さんには会えていなかったの。」

「病院に通ったりする間とか、お父さんはどうなったかなあ、ちゃんとお父さんになれたかなあって思ったり。」

3. 実習指導者との関わりで得た経験

学生は、実習指導者からの助言や指導のほかに実

習指導者との関わりでの気づきも語った。

1) 【看護者としての関わりを学ぶ】

<優しく、肯定的な表現での対応に気づく>

「看護師さん、助言や指導はきちんとして下さって、言い方だとか、角がないっていうか、優しいなあっていう風に思いました。(略) 妊婦さんとか産婦さん、褥婦さんに対してなるべく、こう不安な思いは抱かなくていいように、きちんと、お母さんとしての愛情が芽生えていけるように、看護師としても、コミュニケーションの取り方っていうか、肯定的な言葉を使うとか、実際の関わり方をみていると、それがどういうことを意味するかわかってきて声かけだとか、きっと考えてしているんだろうなあって思いました。」

<言葉の重みを知る>

「お母さんがこれは、自分で息をしているんですか？って聞いたんですよ。もう元気に頑張ってる息してますよって(略) ほんとに頑張っているんだって思えるだろうし、医療従事者がいう言葉の重みってあるだろうなあって思って。(略) お母さんにとって、言葉の重みとか嬉しさとかも違うのかなって思いました。」

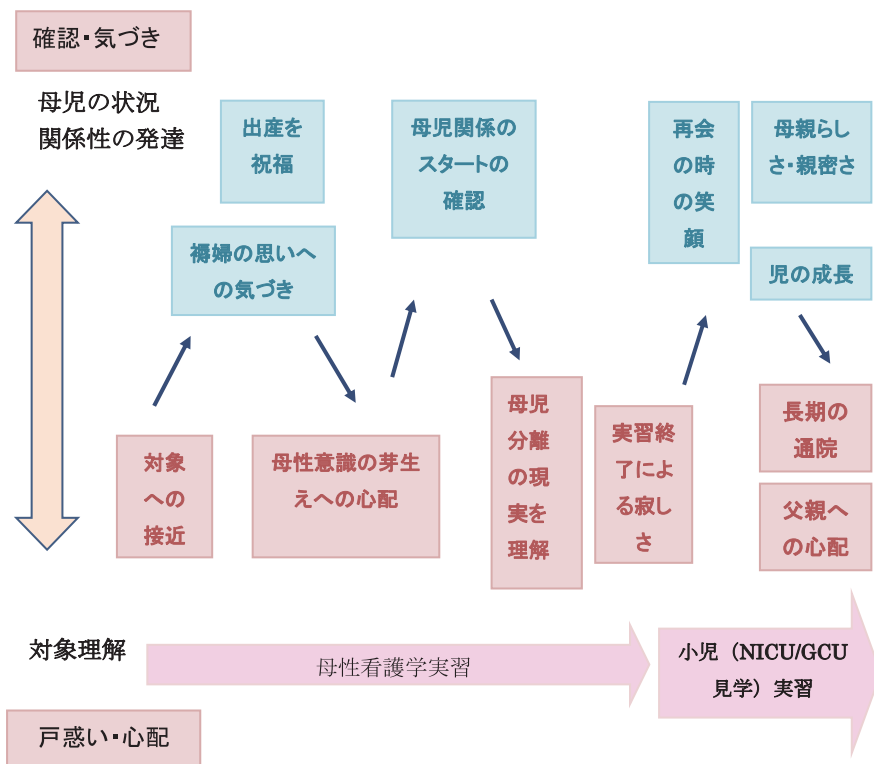


図 1 母性から小児 (NICU/GCU) 見学実習での学生の経験

4. 実習終了後の経験

学生は、本実習を終えた後自己を振り返った。その語った内容から、次の3つのカテゴリーが抽出された。

1) 【家族のあり方や支援への興味・関心の高まり】
 <母性・小児の実習をとおして、家族について考える>

「ほんとにいろんな家族があって、そういう家族の絆とか考え方とか価値観とかがあって、支え方があって、そういうのがうまく機能できている家族もあれば、そうでない家族もきっとあるんだろうなあ。」

<夫婦間の関係を考える>

「次の子どもについての話もするのかなあとか、夫婦でそんな話をしながら、少しずつ家族になっていくのかな。」

2) 【母親としての役割や責任の理解】

<母親になるのは、自律、覚悟、責任感が必要>

「自分もこう、一人の女性として、社会人として自律してから、母親になるのが理想だと思う。」

<子どもの人生を握っている>

「病気をしたり、時に心に傷を負ってしまったたり、そんなことから見守って、助けることもしなきゃいけないし、母親として大切な役割があるし、すごく責任感があるし、子どもの人生を握っているんだなあって思ってる。」

3) 【自己の将来像と課題を見出す】

<結婚、出産、家族になることへの意味づけ>

「結婚や出産したり、夫婦になっていったり、家族になっていったりっていうのは、複雑な大変なことで、でも素敵なこともたくさんあって、ただ単純なことなんかじゃなくて、人の人生の一部になっていくし、何かすごく大変なことだなって。」
 「看護師としての生き方と、家族だとか、女性としての生き方をどういう風につなげていこうかと考えたりして、例えばお母さんをずっと観ているので(略)もっといろんな家族だとか、家族のあり方を考えていきたいなあって。」

V. 考察

本研究での学生の経験は、女性が早産することへの理解や母児分離時の母親へのケア、NICUでの健康障がいを持つ児と家族(母親)への援助、看護者の関わりへの気づき、実習を終えて、自分の将来や

課題を統合するという経験となった。

母性看護学実習での学生の経験は、受け持った対象妊婦への接近から始まり、早産後、褥婦のNICUの初面会から同行させていただくという貴重な経験、現象への出会いとなった。早産の母親は、出産に対する期待が奪われた体験をするといわれ、出産に対する期待をくつがえされた衝撃や想像と違う子どもから受けた衝撃をうける⁸⁾という。学生は、早産前にこの対象者を受け持ち、戸惑いや工夫を重ねながら、学生として接近していった。早産後も継続して関わることができた学生は、児との初面会の母親の反応、衝撃であったと思われるその現実について、その場で率直に受け止めていた。

その後学生は、小児看護学のNICU/GCU見学実習での再会により、早産後、ことに母親退院後の移行期のケアとしての家族支援、母児の関係性の発達のプロセスにふれる機会を得ることが出来た。母親役割への適応には、子どもへの愛着の高まりや子どもの存在による自己成長がふくまれ、子どもの成長を見いだす試みが親役割適応過程の中でみられる⁹⁾という。学生は、数週間後に再会した母児の様子について、母親役割適応過程を一部としてであるが、実習で確認する経験ができたといえる。母性看護学実習で受け持った周産期にある対象の移行過程とその関わりについて、継続して小児看護学実習で経験できる学生は稀であり、偶然に近いことであったが、本研究での学生の経験は貴重な学びの例となった。

学生は、今回のこれらの実習の中で、対象を理解することとそれに伴う戸惑いや心配と、実際の現象の中での母児の状況や関係性の発達への確認や気づき、これらを行き来する経験(図1)をしながら、看護者としての関わり、その重大さに気づいていった。今後さらに、周産期におけるハイリスク事例への看護、ことに褥婦の周産期病棟退院後の移行期にある母児や家族への継続ケアの重要性について、学生に伝えていく必要があると考える。

また、今回、学生自身がこれらの実習を振り返り、語ることで、母親になることや母親役割についての考察、家族形成への関心の高まり、自己の将来像や課題について考える機会となり、実習での経験が自己の将来への課題の統合へとつながった。

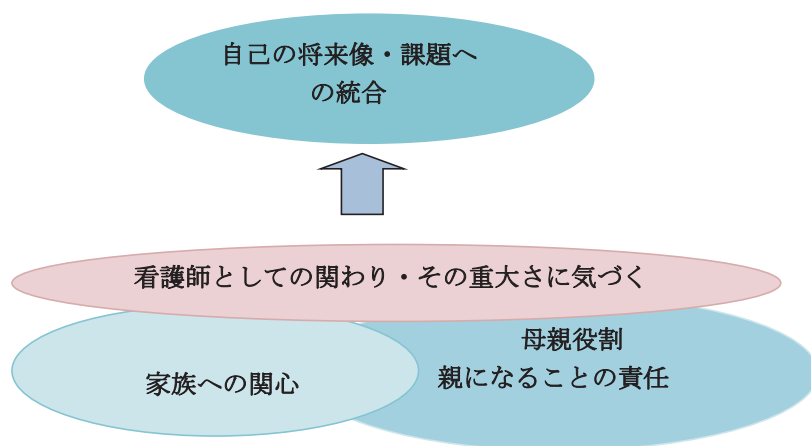


図2 実習を終えての学生の経験

Ⅵ. 結論

本研究において、女性が早産することや母児分離時の母親や家族のケアの必要性、看護者としての関わりなど、早産となった母児との関わりをとおして、母性看護から小児看護への継続した看護プロセスに出会う学生の経験が明らかとなった。

謝辞

本研究のインタビューにご協力いただいた学生、実習指導の看護職の皆様、そして学生が受け持つことを承諾して下さった対象者の方に深く感謝いたします。

本研究の一部は第24回日本新生児看護学会学術集会（2014年）で口演にて公表した。

滋賀医科大学看護学ジャーナル、10（1）、22-27、2012.

- 5) Sandelowski.M, : The Problem of Rigor in Qualitative Research、Advances in Nursing Science, 8, 27-37, 986.
- 6) 新村 出編：広辞苑 第六版（電子版）、岩波書店、2008.
- 7) 日本産婦人科学会編：産科婦人科用語集・用語解説集、改訂第2版、金原出版、2008.
- 8) 安積陽子著：早産児をもつ母親の役割獲得過程に関する研究、日本助産学会誌、16（2）、28、2003.
- 9) 前掲書8）、30-32.

Ⅶ. 引用文献

- 1) 財団法人 母子衛生研究会：母子保健お主なる統計、平成26年度、54-55、2014.
- 2) 大久保明子ほか著：NICU 実習の学生の対児感情におけるカンファレンス導入の効果、新潟県立看護短期大学紀要、7、3-8、2001.
- 3) 今井由理著：NICU 実習において学生が学んでいること ―看護の心に焦点をあてて―、神奈川県立保健福祉大学実践教育センター、看護教育研究集録、38、2013.
- 4) 白坂真紀ほか著：NICU/GCU 実習における看護学生の学び 小児看護学実習記録の分析から、